
2018年度 博士論文要約

イエス・パウロ・初期キリスト教における独身

——周辺世界の事例との比較にみる動機の特徴——

指導教授 廣石 望 教授



立教大学大学院

キリスト教学研究科

キリスト教学専攻 博士課程後期課程 3年

16TH001N

ちがさき しょうへい
千ヶ崎 祥平

❖ 論文の目次

I. 序論

- I.1. 研究の動機と意義
- I.2. 研究目的・仮説
- I.3. 研究方法
- I.4. 本論文の構成

II. 初期ユダヤ教における独身

- II.1. エッセネ派／クムラン宗団
 - II.1.a. エッセネ派
 - II.1.b. クムラン宗団
- II.2. テラペウタイ
- II.3. 初期ユダヤ教における独身

III. ギリシア・ローマ世界における独身

- III.1. ウェスタの巫女
- III.2. ストア派
- III.3. ギリシア・ローマ世界における独身

IV. イエスにおける独身——マタ 19:10-12 の釈義

- IV.1. マタ 19:10-12——本文と私訳
- IV.2. 本文批評
- IV.3. 伝承史的考察
- IV.4. 真正性の問題
- IV.5. 各節の考察
- IV.6. 独身の動機——「神の国」を具現化する預言者的象徴行動

V. パウロにおける独身——I コリ 7 章の釈義

- V.1. I コリ 7:1、7-8、25-35——本文と私訳
- V.2. 本文批評
- V.3. 各節の考察
- V.4. 独身の動機
 - V.4.a. 「主のこと」への専念——背景は終末論
 - V.4.b. 童貞性・処女性の評価——聖性の追求

VI. 初期キリスト教における独身

- VI.1. アンティオキアのイグナティオス
- VI.2. アレクサンドリアのクレメンス
- VI.3. テルトゥリアヌス
- VI.4. 初期キリスト教における独身

VII. イエス・パウロ・初期キリスト教における独身

- VII.1. 各人物・集団における動機の特徴——周辺世界との比較から
 - VII.1.a. 終末論
 - VII.1.b. 特定の事柄への専念
 - VII.1.c. 童貞性・処女性の重視
 - VII.1.d. 性欲の罪悪視
 - VII.1.e. 祭儀的清浄への関心
 - VII.1.f. 神的存在の模倣
- VII.2. 通時的考察——独身をめぐり関心の推移
 - VII.2.a. 童貞の称揚・性欲忌避・「キリストの模倣」が表面化——終末は観想対象に
 - VII.2.b. 独身の預言者的機能——現世における来世的生活

VIII. 結論と今後の課題

- VIII.1. 結論
- VIII.2. 今後の課題

謝辞

参考文献

❖ 論文の要約

前掲目次の通り、本論文は、序論（I章）、各事例に関する個別研究（II-VI章）および通時的考察（VII章）からなる本論、結論（VIII章）の全8章から構成される。

序論では、先行研究の動向および本研究の目的・方法・筆者の仮説等が扱われる。

キリスト教には、終末論的期待に基づいて、また、「キリストの模倣」や聖性の追求、結婚以外の事柄への専念等を目的として、結婚しないことに宗教的価値を与える伝統が存在する。新約聖書には独身を肯定的に評価した以下のイエスとパウロの言葉が収められており、しばしば聖職独身制の根拠としても参照される。

「天の国のために自身を去勢した宦官たちがいる。」（マタ 19:12c）

「結婚していない者はいかに主に気に入られようかと主のことに配慮します。」（Iコリ 7:32b）

これらの聖書箇所および初期キリスト教の独身に関する個別的研究は既に多数存在する。しかし、周辺世界との比較に重点を置き、かつ、イエスから初期キリスト教に至るまでを広く視野に入れて独身を評価する動機を解明する通時的研究は未だ十分に行われているとは言いがたい。したがって、当時の宗教世界の文脈に照らしつつ、独身に関するイエスやパウロの思想とその影響史を辿ることは、新約学のみならず、関連諸分野における宗教的独身に関する研究にも新たな知見を提供できる有意義な試みであると思われる。

本研究の目的は、当時のユダヤ教やギリシア・ローマ世界の様々なテキストに照らして新約聖書並びに初期キリスト教文書を分析することにより、イエスから初期キリスト教までの時代にみられる宗教的独身に対する肯定的価値付けの動機がいかに変遷していったか、また、そのような生き方がどのような社会的・宗教的機能を備えているかを明らかにすることである。具体的な手順としては、まず、イエス・パウロおよび4世紀頃までの初期キリスト教を調査範囲として、独身をめぐる思想を改めて個々に考察する。そして、同時代および近接する時代のユダヤ教やヘレニズム世界における独身主義の並行事例との比較を通じて、宗教思想史的観点からの通時的分析を試みる。とりわけ、各人物・集団の著作に反映する思想や第三者の描写に着目して調査を行うことに重心を置くが、これと併せて、その背後に存在すると推測される内的動機に関して再構成を試みることも本研究の射程に含まれる。

筆者の仮説は次の通りである。初期キリスト教においては、イエスとパウロに顕著な終末論的動機に代わって、処女性・童貞性自体の評価、独身の神の模倣、性欲の罪悪視という、

ヘレニズム世界の異教や哲学に由来する動機が前面に出るようになった蓋然性が高い。独身主義は既に初期ユダヤ教にみられるが、イエス・パウロにおいて終末論と結び付き、初期キリスト教が継承者となるものの、その動機は周辺世界の思想の影響を受けて形成されたと思われる。イエス・パウロ・初期キリスト教の独身は、結婚のない来世的な生き方を現世において預言者的に身をもって示す共同体を作る機能を持つと考えられる。

本論文では以下の研究方法を用いる。イエス・パウロに関係する議論では、先行研究を批判的に継承しつつ、新約聖書学の歴史的・批判的研究の立場に立脚して分析を行う。その他の文献についても同様のテキスト重視のアプローチを中心とするが、客観性を担保するため、ユダヤ学や聖書考古学、西洋古典学、教父学等の隣接分野の成果を援用する。

本論冒頭の II 章では、初期ユダヤ教の独身主義を取り上げる。古代の作家の証言から、エッセネ派の少なくとも一部が性欲を罪悪視して独身生活を実践したことが知られる。考古学的にみて同派に属する可能性が高いクムラン宗団は、性欲を忌避し、神殿祭司に勝る祭儀的清浄の維持を目的に性的交わりを回避したことがクムラン文書から推測される。また、テラペウタイは聖書研究に従事し、特に女性は性欲を放棄して知恵の追求に専念したとされる。ただし、これらの独身主義は、終末論や天使論をその基盤としてはいない。ラビ・ユダヤ教では、律法研究のため独身を貫くベン・アツザイのような例外はみられるが、子孫繁栄を重視し、独身に否定的な旧約同様の思想が主流となる。

続く III 章では、同時代のギリシア・ローマ世界の独身をめぐり思想を扱う。異教の独身主義の例としては、ローマのウェスタ神殿で聖火の保守を行う、純潔が義務付けられた巫女が著名である。彼女らは処女神を自ら模倣する特権階級であり、祭儀的清浄と結び付いた処女性に価値が置かれている。その一方、ヘレニズム哲学では、ストア派は一般に「不動心」を重視し、感情は悪であって性欲等の欲望もそこに含まれるとみなすが、独身主義との直接的関連はない。ただし、同派のエピクテトスの場合、「妨げられることのない」哲学への献身が可能な独身生活を優位に置いている。

次の IV 章は、イエスの独身を考察対象としている。「天の国」の宦官についての言葉（マタ 19:10-12）のうち 12a-c 節が伝承史的に最古であり、宗教的独身者を自己去勢者とする隠喩（12c 節）が独特であるゆえに史的イエスに遡る蓋然性が高い。人は復活の際に結婚せず、天使のようになるとの発言（マコ 12:25 並行）の背後には、復活した者は天使のようになり、天使は不死のため繁殖が不要であるとの黙示思想（エチ・エノク 15:6-7、104:4-6）が存在する。彼は自身の独身を、来るべき「神の国」における永遠の命や繁殖の不必要性を先駆的に体現する預言者的象徴行動とみなし、その生き方を「『神の国』のための宦官」という表現で肯定的に表現したと思われる。

そして V 章では、独身に関するパウロの思想を分析している。彼による独身の奨励（I コリ 7 章）は、終末が近いという意識を背景としており（29、31 節）、その主要目的は、結婚生活等の「世のこと」に煩わされずに「主のこと」に専念することである（32-34 節）。

「分かたれてしまっている」(34節) ゆえに宗教的事柄への専念が不可能な既婚者と対比させる形で、独身者の優位性が示されている。さらに彼は性的関係の回避を聖性と関連付け(6:15、19)、童貞性・処女性にも関心も示しており、性交渉は汚れをもたらすとの判断(レビ 15:18) から独身を称揚したとみられる。

VI章では、教父を中心に初期キリスト教における独身の動機付けを考察する。初期キリスト教においては、誇らず純潔を保つことを評価するイグナティオスや、神殿である体の清さに関心を示すアレクサンドリアのクレメンスのように、身体的聖性を追及する側面が顕著に現れる。また、クレメンスやテルトゥリアヌスに代表される、性欲との決別と合体した独身主義が発生する。さらに、テルトゥリアヌス等にみられるように、独身を「キリストの模倣」の一環とするキリスト教的解釈も誕生する。他方、終末が近いとの立場から独身を勧める説は非支配的となり、ニュッサのグレゴリオスやシリアのエフレムの例が示すように、終末は観想対象へと変化したと推察される。

本論最後のVII章では、ここまでに取り上げた人物や集団にみられる独身に関する様々な思想の共通点と相違点を洗い出して分類する。次に、イエスから初期キリスト教の時代にかけて独身の動機および思想的背景がどのように変化していったかを、周辺世界の諸事例との影響関係を踏まえて通時的に考察する。以上の観察によると、同時代のユダヤ教やギリシア・ローマ世界の並行例とは異なり、イエスとパウロの独身の動機には切迫した終末論が共通して存在しており、その点では独自性が強い。他方、処女性・童貞性の重視や神的存在の模倣に由来する独身は、その前例が異教に存在し、使徒教父以降にキリスト教化されて受容されたと考えられる。また、ストア派等のヘレニズム哲学に遡源する性欲忌避の思想は、初期ユダヤ教・初期キリスト教に流入して独身の動機付けの一つとして発展したと推定される。すなわち、初期ユダヤ教の独身主義を継承した初期キリスト教においては、切迫した終末論が影を潜める代わりに終末についての思索との関連が強まる一方、周辺世界の影響下でこれらの多様な意味付けが与えられたといえる。イエス・パウロ・初期キリスト教における独身という生き方は、結婚を超越した来世における生活の姿をこの世の中で預言者のように自ら身をもって示す集団を形成する機能を持つと思われる。

結論となるVIII章では、以上の議論の要点を整理するとともに、今後解決されるべき残された課題を確認する。